

登場人物

高田香織 ……三十二歳。
高田淑子 ……六十二歳。香織の母親。

高田家のリビング。

使い込まれて飽色になった家具。どこか懐かしい床のデザイン。室内は几帳面に手入れされている。

舞台中央に布ばりのソファ。その手前に木製のローテーブル。ソファにはピンチがついたままの洗濯物。

ローテーブルにはバラを生けた花瓶が置かれている。シンプルな花瓶。小振りのイングリッシュローズ。

淑やかな濃いピンクの花弁が幾重にも重なる。上手には腰高の棚。

電話や書類、箱ティッシュなどが整然と並んでいる。その横にはゴミ箱。

壁には緑色のカーディガンが掛けられている。カーディガンは着古されて、色も少し褪せている。

下手には大きな掃き出し窓。外は庭。正面には扉が二つ。

上手側を出ると廊下。玄関や階段、娘の個室に繋がっている。下手側を出るとキッチンである。

五月の夜。

ソファに香織が座っている。ベージュのロングスカートに白いシャツ。膝掛けをかけている。シャツの生地はくたびれてあまり清潔そうではない。スカートから覗いているのは右足だけ。

左足は膝から下がない。傍らには松葉杖と無骨な皮の鞆が置かれている。香織、自分の場所を確保するために洗濯物をどける。

洗濯物がピンチごと床へ落ちる。

上手の扉から淑子が慌ただしく入ってくる。

張りのあるTシャツとシンプルなパンツ。春らしい色の上着。

淑子は義足を抱えている。

使い込まれた義足。

樹脂製の黒いソケットや金属部分が露出している。

淑子、息を整える。

淑子 ごめんね、待たせて。(義足を差し出す。) ほら、これ。

香織 臭い。

淑子 え？

香織 バラ、ひどい匂い。

淑子 いつもと変わらないじゃない。(義足を下ろす。)

香織 (花瓶を指し) こんな飾るからよ。庭ので充分なのに。

淑子 だって折角いただいたんだし。

香織 どっか持ってって。

淑子 バラに当たってもしょうがないじゃない。(義足を置き、花瓶を棚に移動する。)

香織 一緒でしょ、そこじゃ。

淑子 ……あとで上に持って行くから。(義足を持ち上げ) これ、前の。随分使
つてないけど大丈夫かしら。ちよっと着けてみて。

香織 擦れるのよ、そのソケット。

淑子 しょうがないでしょ、新しいの作り直すまでは。

香織 置いといて。

淑子 着けないの？

香織 後で。

淑子 どこか痛むの？大丈夫？

膝掛けの上から香織の左足に触れようとする。

香織 触らないで。

(間)

香織 今日はもう寝るだけだから。

淑子 大丈夫なの？

香織 なにが？

淑子 え、足。

香織 義足？

淑子 足よ、あなたの。

香織 ああ足ね。

淑子 ……ねえ、なにがあったの？

香織 そこ開けて。

淑子、香織に身体を寄せる。

淑子 話せるでしょう、私には。

香織 換気。

淑子 こっち見なさい。

香織 (はじめて淑子を見て) お母さん、化粧崩れてる。

淑子 そんなこといいから。

香織 いつも人の顔に文句つけるくせに。

淑子 慌てて行ったんじゃない。あなたが動けなくなったって言うから。なのに車の中でも黙ったままで。

香織 別にいいけど、すっぴんだろーうがなんだろうが。

淑子 説明して、お願いだから。

香織 窓開けてよ。

淑子 開けたって変わらないわよ。

香織 じゃあ、いい。

松葉杖に手を伸ばす。

淑子、仕方なく窓をあけてやる。

庭の空気が入ってくる。新緑。バラの香り。

淑子 (外の空気を吸い込み) ね。

香織 ……。

淑子 (庭のバラを見て) 満開なのよ、久しぶりに晴れたから。見える？

香織 もういい、閉めて。

淑子 ……。

香織 閉めてっば。

淑子、窓を閉める。

香織 のど乾いた、水ちょうだい。

淑子 ねえ、なにがあったの？

香織 水。

淑子 どうしたっていうのよ、ほんとに…。

香織、淑子を見上げる。
淑子、キッチンへ行く。
香織、花瓶のバラを見る。
鼻に両手をあて、その匂いを嗅ぎ、両手を見つめる。
淑子、水を注いだグラスを持ってくる。

淑子 わからないのよ、どういうことなのか。(グラスをテーブルに置く) だって、わからないじゃないのよ、そんな風に黙ってたんじや。
香織 盗まれたって言ったでしょ。
淑子 聞いたわよ、それは。けどただそう言われたって。
香織 外してたら持って行かれちゃったの。
淑子 どうしてそんなこと。
香織 セックスする為に決まってるでしょ。
淑子 ……。
香織 ラブホテルでピクニックしてるとでも思った？
淑子 そうじゃなくて、どうして義足なんか盗って行くのかって言ってるの。
香織 さあ、マニアだったんじゃない。
淑子 誰なの？ 相手は。
香織 (水を飲み) 知らない人。
淑子 ……連れ込まれたの？
香織 したかったから行って行った。それだけ。
淑子 嘘よ、あんな声で電話してきて。
香織 空調のせい、鼻が止まらなかったの。
淑子 入ってなかったわ、空調なんて。
香織 じゃあアルコール。
淑子 飲まされたの？
香織 (グラスをテーブルに置き) 飲んだの、一緒に。
淑子 だってそいつなんでしょ、義足盗んだの。そいつ？ そいつら？
香織 強盗団じゃないんだから。
淑子 乱暴されてないの？
香織 セックスのこと？ したわよ、それなら。
淑子 だから、それって。
香織 カーディガン取って。

淑子、カーディガンを取る。
香織、鼻を両手で覆い、その匂いを嗅ぐ。

淑子 (カーディガンを渡し) やっぱり明日行きましょう。

香織 通報しないって言ったじゃない。
淑子 しないわよ、そうじゃなくて。
香織 でも。
淑子 警察は嫌なんでしょ、わかってるから。
香織 だけど義足高いし。
淑子 百五十万くらいなによ。身体は代えが利かないんだから。
香織 そうかな。
淑子 警察は行かなくていい。だけど病院は……
香織 何科に行くの？ 精神科？ リハビリ科？ それとも……
淑子 一緒に行つてあげるから。
香織 必要ない。
淑子 池袋か上野あたりなら知り合いに会うこともないわ。どこか女医さんがいるところ探して。
香織 セックスしただけだつて言ってるでしょ。
淑子 本当に？ 本当に心配なの？
香織 大丈夫だつてば。
淑子 避妊、したのね。どうなの？
香織 するわけないでしょ。
淑子 全然大丈夫じゃないじゃない！
香織 だつて面倒でしょ、つけて、とか言うの。
淑子 言える状況じゃなかったんでしょ。
香織 違うつて。
淑子 だつて三十分よ。私が行くまで三十分もあつたのに、荷物は投げ出されたまんまだつたし、受話器も外れっ放し。どうみても普通じゃなかった。
香織 わかった。行けばいいんでしょ、行けば。
淑子 ……可哀想に。怖かつたでしょう。
香織 だからレイプじゃないつてば！
淑子 だつて。
香織 行けつて言うから行くだけ。決めつけるなら行かないから。
淑子 じゃあ違うのね。信じていいのね。ねえ、どうなの？
香織 行つて欲しいの、欲しくないの、どっち？
淑子 行つて欲しいわよ、そりゃ。
香織 じゃあ、もういいでしょ、話は終り。
淑子 だつてなにがなんだか全然わからないじゃないの。違うなら違うでちゃんとわかるように説明してよ。

電話が鳴る。

香織、電話を見る。

淑子 お願い、始めからちゃんと話して。誰にも言ったりしないから。ホテル街に何しに行ったの？

香織 ……。

淑子 ねえ、昼に家を出てそれからどこでなにしてたの？

香織 鳴ってる。

淑子 ごまかさないでちゃんと話して。家じゃ気が散るから外で書いてくるなんて言ってる、あなたパソコンも持ってなかったじゃない。

香織 鳴ってるってば。

淑子 そりゃ鳴るわよ、電話は！

電話切れる。

香織 切れちゃったじゃない。

淑子 大事な用ならまた掛けてくるわよ。それより話して。その男とどこで会ったの？ ねえ、香織。

香織、電話を見つめている。

淑子 誰か掛けてくる予定でもあるの？

香織 そういう訳じゃないけど。

淑子、香織を見つめる。

鞆の中で香織の携帯が鳴る。

携帯に二人の視線が注がれる。ほんの数秒。

香織、鞆に手を伸ばす。

淑子、鞆を奪う。

香織 何すんの。

淑子、携帯を出して相手を確認する。

香織、携帯をひったくる。

相手を確認し、安堵。携帯に出る。

香織 はい。……うん、お疲れ様。今うちに電話した？ ……ああ、ごめん出られなくて。

淑子、上着を脱ぐ。ソファの背もたれに掛ける。

香織 ……ああ今日か。……うん、書いてるんだけどまとまらなくて……そりゃ

そうなんだけど……（間）……え？ ああごめん聞いてなかった。ちょっとぼーっとしてて。……ねえ、あのさもう一日待ってくれる？ ……わかってるけど、明日までにあらすじだけでもなんとかするから。……うん、わかってる。ごめん。ありがとう。……あ、あれどうした？ 知り合いの編集部に持込んでみるって言ってたでしょ。……そう……でもさ、出版社が絡むととにかく面倒だっていうし、まあいいよ。大丈夫、なんとかなるよ。……うん、わかった。考えとく。じゃあね。……はい。

電話を切る。

淑子 電話。

香織 真理ちゃん。同人誌の。

淑子 教えたの？ 番号、その男に。

香織 教えるわけないでしょう。

淑子 だけど。

香織 同人誌、実費でやることになったの。

淑子 え？

香織 一人五万だって。

淑子 ああ、そう。それより。

香織 貸してね。

淑子 え？

香織 五万。

淑子 そんな急に五万って言われたって。

香織 百五十万くらいなんでもないんじゃないの。

淑子 何言ってるんよ。それとこれとは全然話が違うでしょ。

香織 冗談、真面目に取らないでよ。

淑子 ……。

香織 いいよ。バイトでもしてなんとかするから。レジ打ちか、コンビニか。あ、

義足のキャンペーンガールなんてどう？

淑子 わかったわよ、ホテルでのこと聞いたら、ちゃんと考えるから。まずは聞かせて。お金の話はそれから。

香織 そんな悠長にしてらんないんだけど。

淑子 あなた事件に会ったのよ。それより大事なことなんてある？

香織 作家にとって作品より大事なものなんてない。

淑子 そうやって現実から逃げたって何も解決しないのよ。どんどん話しづらくなるだけじゃない。

香織 もういい。どうして女って自分の話が一番大事だと思うんだろう。離婚しなくなる気持ちもわかるわ。

淑子 親に向かってなんてこと言うの！

香織 別にお母さんのこと言ったんじゃない。

淑子 じゃあ誰のことよ。あなた私としゃべってたんじゃない。私のこと言ってるのしか思えないじゃない。

香織 はいはい、誤解させてすみませんでした。

淑子 どうしてそういうこと言うの？ 人の気持ち逆なですることばかり。

香織 ジャージは？ 部屋？

立ち上がろうとする。

淑子、その腕を掴む。

香織 ちょっと、放して。

手を振り払う。松葉杖に手を伸ばす。

淑子、松葉杖を奪う。立ち上がる。

香織 なにすんの、返してよ。

淑子、後ずさる。

淑子 話は終わってない。

香織 着替えたいの、落ち着かないでしょう。

淑子 話してくれるまで部屋に入れない。

香織 勘弁してよ。

淑子 もっとちゃんとわかるように話してくれなきゃ。

香織 これじゃトイレにも行けないじゃない。

淑子 行きたかったら話しなさい。

香織、義足に視線をやる。

淑子、義足も抱える。松葉杖と義足が腕の中にある。

香織 返して。

淑子 (自分に言い聞かすように) 駄目よ。

香織 じゃあパソコン。

淑子 は？

香織 持ってきてよ、部屋から。

淑子 そんなものどうするの。

香織 聞いてたでしょ。明日までにあらすじ書かないといけないの。

淑子 こんな時に小説なんて。

香織 今日締切りだって忘れてたの。待ってもらってるから。

淑子 たかが同人誌じゃない。
香織 たかがって。遊びでやってるんじゃないのよ。
淑子 今日はもう寝るんじゃないの？
香織 書きたいことが浮かんだってば。
淑子 だったら後でゆっくり書けばいいわ。話すのが先。
香織 もう……

再び電話が鳴る。

二人、はじかれたように電話を見る。

淑子、松葉杖と義足から手を放す。

受話器に飛びつく。電話に出る。

淑子 もしもし……あ、弓枝さん？ ああ、ごめんなさい……ううん、なんでもないの。

香織、松葉杖に手を伸ばす。

淑子、松葉杖と義足を抱え直す。

淑子 さっきはごめんなさいね。突然帰ってもらっちゃって。心配したでしょう。取り乱しちゃったから。……うん大丈夫、大したことないの。ちょっとバイクに引っ掛けられて。

香織、鞆からノートとペンを出す。ノートを開く。メモを書く。

淑子 ううん全然、怪我もしてないし。……そう、だから心配しないで。……ありがとう。……朗読会のことはまた改めて。……はい。じゃあ。

電話を切る。

香織 来てたんだ。

淑子 ちょっと朗読会のことです。

受話器をホルダーに戻す。

香織 バイクってどんなやつ？

淑子 どんなって普通のよ、その辺に止まってる。

香織 どこで引っ掛けられたの？

淑子 っか、その辺の……

香織 具体的に言ってくれないとわかんないでしょ。色は？

淑子 意地悪言わないで。あなたのことじゃない。

香織 今度会った時あの人絶対聞いてくるよ。

淑子 大丈夫よ、納得してたから。

香織 もうちよっと考えて嘘つけばいいのに。怪我くらいしてなきやおかしいでしよ。

淑子 だってとっさに思いつかなかったんだもの。

香織 いいけど、別に。

メモを書く。

淑子 なに書いてるの？

香織 ……。

淑子 小説？

香織 あらすじ。

淑子 話すのが先だって言ってるでしょ。

香織 ねえ、あの電話、何時だった？

淑子 は？

香織 (携帯を確認して) まだ七時前だったんだ。(メモを書く。)

淑子 今日のこと小説にするつもりなの？

香織 いけない？

淑子 ちよっと待って、どうして？

香織 こんな経験書かないでどうすんの。

淑子 書けるわけじゃないじゃない、私にさえ話せないくせに。

香織 小説だから書けるんじゃない。

淑子 意味がわからない。やめなさいよ、書くの。

香織 お母さんも読めば。何があったか知りたいんですよ。

淑子 書くなってるんでしょ、私は。

香織 どうして？ 矛盾してるじゃない。知りたいって言うから読めばって言うてるのに。

淑子 矛盾してるのはあなたでしょ。警察行きたくないって言ったのは、人に知られたくないからじゃなかったの？

香織 フィクションだから。

淑子 ノンフィクションじゃない。

香織 読者にとっては。

淑子 義足の人間がレイプされる話なんか書いたら、誰だってそれに近いことがあったんだと思うでしょ。

香織 好きに解釈すればいい。どう読もうが読者の勝手。

淑子 わかっているの？ 人に知られるっていうことがどういうことか。あなたの将来にどう影響するか。

香織 将来ってなに？ 女としての幸せってこと？

淑子 それだけじゃない、なにもかもめちゃくちゃになる。傷つくのはあなたなのよ。

香織 それでも本は、僕たちの内部の凍結した海を砕く斧でなければならぬ。
淑子 なにそれ、誰の言葉？ どうしていつも訳のわからないことばかり言うのよ。

香織 わからないでしょうね。

淑子 本になんかしなくたってちゃんと聞いてあげる。駄目なの？ それじゃ。

香織 駄目に決まってるでしょ。

淑子 どうしてよ。私はあなたの母親なのよ。

香織 だからよ。

淑子 え？

香織 他の誰に話せても、お母さんには話したくないの！

(間)

淑子 どうしてそんなこと言うのよ。

香織 しつこいからよ、いつまでもグジグジと。

淑子 心配してるんじゃない。

香織 バイクに引っ掛けられたなんて、バレバレな嘘ついといてよく言うよ。自分
分が可愛いだけじゃない。

淑子 そうじゃないわよ、私はただ……

香織 どうせなら地雷原に寄付したとか言えば美談になるのに。

淑子 ……

香織、メモを書く。

淑子、しばらく香織を見つめている。

グラスを手取る。立ち上がる。

キッチンへ入る。

香織、メモを書いている。

淑子、戻ってくる。

淑子 (明るく) なにか飲む？ 暖かいものでも。

香織 なによ気持ち悪い。

淑子 ホットミルクなんてどう？ 暖まるわよ。

香織 いらぬ。もう寒くないから。

淑子、洗濯物の前に座る。

ピンチを外し始める。

淑子 いい匂い。お日様の匂いがする。

洗濯物をたたむ。

香織 無視して書き続ける。

淑子 ねえ。

香織 ……。

淑子 一緒にたたまない？ そんなの書いてないで。

香織 ……。

淑子 昔よく手伝ってくれたじゃない、たたみながら歌歌ったりして。

香織 ……。

淑子 楽しいわよ、ほら。

洗濯物を差し出す。

香織 無視して書き続ける。

淑子、差し出した手を下ろす。

洗濯物をたたむ。作業は一向に捗らない。

淑子 弓枝さんね、張り切ってるのよ、来月も朗読会やろうって。

香織 ……。

淑子 今度はいつもの和室じゃなくて、入ってすぐの……、ほら選挙のとき投票所になる……ねえ、ほら……。

香織 大会議室。

淑子 そう、そっちでやりたいんですって。この間和室でぎゅうぎゅうだったでしょう。区内報に載ってから急に人が増えちゃって。浅井さんでしょう、佐藤さんに木村さん、あと市川さんとこのおばあちゃんも。あなたの文章のおかげね。

香織 ……ただの案内文でしょ。

淑子 レポートって形式が良かったのよ、臨場感があって。

香織 ……。

淑子 これだけ人が集まったんだから、発表会もしてみたいって言ってるのよ。弓枝さんなんか今度お芝居のワークショップにも行ってみるって。

香織 ……。

淑子 あなたもまた来るでしょう？ ね、来るわよね？

香織 いいよ、私は。

淑子 どうして？ やっとメンバーの名前覚えてきたところじゃない。

香織 ……。

淑子 皆、いい人でしょう？ あ、足置きのこと、弓枝さんにお礼言わなくちゃ

ね。義足で座りっぱなしだと浮腫むんじゃないかって、わざわざビールケースにクッションひいて持ってきてくれたんだから。

香織、顔をあげる。

淑子 なに？ どうした？

香織 ちょっと静かにしてくれない。

淑子 ……。

香織、メモを書く。

淑子 そうだ、相談に乗ってくれない？ どの作品読むか。

香織 参考にならないよ、私の意見なんか。

淑子 今のところは「最後の一片」にしようかと思ってるんだけど。

香織 ……。

淑子 またOヘンリーだって言いたいんですよ。ねえ。

香織 別に。

淑子 そう言うけど、代表作よ。

香織 ふん……。

淑子 それにこんなご時世だからこそって、みんなが言うもんだから。

香織 ……。

淑子 ほら、絵描きの老人が壁のツタに葉っぱを描くでしょ。ツタの葉が全部散ったら死んでしまうと思ってる少女を救いたくて。老人は無理がたたって死んじゃうけど、少女の方は、いつまでも散らない葉っぱに励まされて元気になっていくじゃない。やっぱりね、人を救うのはお金じゃなくて、自分を犠牲にしても相手の幸せを願う気持ちだって。そういうの大切でしょ。

香織 ……。

淑子 どうかしら。ねえどう思う？ ねえ。

香織 いいんじゃない、教科書みたいで。

淑子 ……だったらいかがいと思うの？

香織 え？

淑子 いいじゃない、聞かせて。あるんでしょ、あなたのお薦め。

香織 うるさいなあ。Oヘンリーやればいいじゃない。

淑子 浅井さんだって言ってたわ。「きつと僕なんか知らない話沢山知ってるんでしょね。そういうの聞いてみたいなあ」って。

香織の手が止まる。

顔を上げて、淑子を見据える。

淑子 なに？

香織 ある家族がドライブをする話はどう？

淑子 え？

香織 私のお薦め。

淑子 ああ、どんな話？

香織 ドライブ中にちょっと寄り道するの。お婆さんの思いつきで、ある屋敷を見るためにね。

淑子 うんうん。

香織 でもその記憶は間違いで車は崖から落っこちちゃうの。

淑子 え。

香織 家族は通りかかった車に助けを求めろんだけど、それは脱走中の犯罪者の車だね、家族はあっという間に取り囲まれてしまう。

淑子 ……。

香織 だけどこの犯人が意外と紳士的でね。銃を向けながらもお婆さんをちゃんとレディとして扱うの。お婆さんはこの人だったら命を助けてくれるかもしれないと思って「あなたはいいい人だ、そこらの人とは全然違う」って必死におだてて命乞いするの。

淑子 (ハッピーエンドを予測して) わかったそれで。

香織 だけど結局犯人は、なんの躊躇もなく家族を皆殺しにするって話。

淑子 ……。

香織 面白いでしょ？

淑子 え、ああ、そうね。

香織 面白くなかった？

淑子 なんていうの、タイトルは？

香織 「善人はなかなかいない」。

淑子 ……。

香織 だから言ったじゃない、参考にならないって。

淑子 いや読んでみたんだけど……お年寄りにはちよっと……。

香織 感性が違うのよ、教師と作家じゃ。

淑子 ……。

香織、鼻を両手で覆い、その匂いを嗅ぐ。
メモを書く。

淑子、洗濯物をぼんやりと見つめる。

ゆっくりたたみだす。

淑子 いつもそう。

香織 ……。

淑子 端っからわからないって決めつけて。あなたから見たらつまらない人間に

見えるかもしれないけど、私だって教師としてそれなりのものを見てきたのよ。
香織 バラ片づけて。

淑子 ……。

香織 臭くって集中できないから。

淑子 なんでそんなこと言うの？ あなたの父親が出て行ったとき、バラだけは切らないでって頼んだのあなたじゃない。

香織 庭のを切れなんて言っていない。

淑子 この香り好きだったでしょ。あなたの父親といつも庭に椅子並べて、いい香りだねって楽しそうにしてたじゃない。私が手入れしてたってそばにも寄ってこなかったくせに。

香織 だから庭のじゃないってば。

淑子 一緒じゃない、バラはバラでしょ。

香織 あんな流行りものと一緒にしないで。イングリッシュローズなんて香りは強いし花持ち悪いし、好きじゃない。

淑子 折角持ってきてくれたのに。浅井さんだって忙しいのよ。

香織の手が止まる。

淑子 初めてでしょ、誕生日にバラなんて。それもわざわざ家まで持ってきてくれて。

香織 近所まで来たついでよ。

淑子 浅井さんのこと、どう思ってるの？

香織 ……。

淑子 いい人じゃない。「何しに来たの」なんて言われても嫌な顔ひとつしない。恥ずかしそうにバラ抱えて。上がってってもらえば良かったのに。

香織 いいでしょ、別に。

淑子 ああいう人なかなかないわ。朗読会じゃいつも一番に来て椅子並べるの手伝ってくれて。ニコニコしてるもんだからこっちもつい甘えちゃっているいろいろお願いしちゃう。

香織 ……営業だからでしょう。

淑子 あれは意外と苦労してると思うわよ。人が来る度にいちいち手止めて挨拶するでしょう。ああいう不器用なタイプは企業には向かないもの。

香織 ……。

淑子 要するに育ちがいいのよ。ご両親、地方の大学で教えてるって言うたでしょ。ほら、いつも持つてるポストンバッグ。随分年季が入ってると思わなかった？ あれ、お父様から譲ってもらったんですって。なんでも捨てちゃう世の中でいいじゃない、そういうの。貧乏性なだけですよ、なんて笑ってたけど。

ああいう鷹揚な感じってちゃんと大事にされて育った証拠よ。

香織 ……。

淑子 思うんだけど、彼、あなたのこと好きなんじゃないかしら。

香織 (笑おうとして) ……やめてよ。

淑子 だって、あなたが来るとぱっと顔赤らめるし。

香織 怒るわよ。

淑子 なによ、照れちゃって。

香織 ……。

淑子 どうしよう、言っちゃおうかな。本当は言わないでって言われたんだけど。

このバラね。この間の朗読会の際にあんまりあなたの話ばかりするもんだから、今度誕生日だって教えてあげたの。そしたら彼真っ赤になっちゃって。母の日は近いからカーネーションしかないかもって慌てちゃって。

香織 ……。

淑子 きっと幸せよ、ああいう人と結婚したら。

香織 (叫びに近い声で) 女よ！

淑子 え？

香織 お前はいったいまやかしのほかになにを知っているというのか。

(間)

淑子 なんなの、急に。

香織 ……

淑子 なにか気に障ることも言った？

香織 ……。

淑子 大丈夫よ、今日のことは言わなければ。気にすることない。あなたは悪くないんだから。

香織、笑い始める。

淑子 なにがおかしいの？

香織、笑い続ける。

香織 あいつよ。

淑子 は？

香織 義足盗んだの。

淑子 え？ なんて？

香織 だから、あいつが義足を盗んだの。

淑子 は？

香織、メモを書き始める。

淑子 うそ……。

香織、書き続ける。

淑子 冗談でしょ、だって。

香織 ……。

淑子 ちよっと待って。やめなさいよ、書くの。

香織、手を止める。

香織 だから「善人はなかなかいない」んだって。

淑子 嘘よ。どうしてあの人が。

香織 (鼻で笑って) 不器用で育ちのいいあの人？

淑子 だっておかしいじゃない！ どうして義足なんか欲しがるとよ！

香織 わかんないよ、そんなこと。

淑子 まさか、そんなわけないわ、あり得ない。

棚の上の書類をあさる。

香織 なにやってんの。

淑子 電話番号、名簿にあったはずだわ。

香織 かかるわけじゃないでしょ。

淑子 なんでわかるのよ、そんなこと。

名簿を見つける。

受話器を掴む。

電話をかける。

香織 かった？

淑子 ……あ、もしもし、浅井さん？ ……え、あ、いえ、すみません。間違えました。

電話を切る。

もう一度番号を確認する。かけ直す。

淑子 ……あ、もしもし、……あ、すみません……あの番号確認させてください
てもよろしいですか？ えーと……(相手が自分の番号を言った) あ、すみま
せん……はい……はい……あ、こちらの番号は以前から……ああ……いえ、

すみません。はい……失礼します。

電話を切る。

香織 だから言ったのに。

淑子 知ってたの？ 嘘だって。

香織 逃げてく時言ってた。無駄だって。全部嘘だからって。

淑子 そんな。

もう一度電話をかける。

今度は別の相手。暗記した番号。

香織 いくらかけても無駄だってば。

淑子 もしもし、弓枝さん？ 高田です。夜分にごめんなさいね。……うん、大したことじゃないんだけど。この間の朗読会、浅井さん遅れてきたでしょ。

……うん、あの時弓枝さんの携帯に電話あったじゃない。……そう。あの番号わかる？ ……うん、……わかった？ え？ 公衆電話？ そう……。あ、うん、出席名簿ね、ああ、そうね、見てみるわ。……うん、なんでもないの。ちよっと聞きたいことがあって……。じゃあ、また電話するわ。はい。

電話を切る。

香織の鞆が目に入る。

受話器を置く。鞆を掴む。中身をひっくり返す。

香織 なにすんの！

淑子、鞆を投げ捨てる。

散らばった品々。携帯を掴む。

辿々しい手つきで操作しようとする。

淑子 (苛ついて) これ、どうやって表示するの？

香織 履歴なんか残ってないって。

淑子 どうして。電話してきてたんでしょ？

香織 いつも公衆電話だったから。支払いとかつい忘れちゃうんだって。

淑子 こっちは掛けたことなかったの？

香織 ないよ、電話なんかしたら気があるみたいじゃない。

淑子、再び受話器を手取る。

香織 どこにかけるつもり？

淑子 警察よ、決まってるでしょ。

香織 なに言ってるの。いい加減に諦めなさいよ！

淑子 黙ってるて。

香織 通報しないって言ったでしょ。

淑子 誰に知られたっていいんじゃないの？

香織 小説ならって言ってるじゃない。なんでわかんないの。ただの可哀想な被害者なんて最低。

淑子 捜索してもらうだけだから。

香織 同じよ。近所で噂になりたいの？

淑子 だから事件ってことじゃなくて。行方不明だっって言えよ。

香織 事件でもないのに調べてくれると思う？ 日本の警察はそんなに親切じゃないよ。

淑子 別に警察じゃなくたっていい。探偵とか。そうよ。黒い犬のポスター。

香織 探偵だろうがなんだろうが、捜そうと思ったら知ってる人に聞くでしょ。

弓枝さんなんか真っ先に聞かれるよ。いいの？

淑子 ……

香織 弓枝さんに知られたら次の日には町中に知れ渡ってる。人に知られることがどういふことかって、お母さんが言ったんじゃない。

(間)

淑子 だって見ればわかるのよ。痩せてて、目が大きくて、それからひどい花粉症で。

香織 何万人いると思ってるの？ そういう日本人。

淑子 両親が勤める大学だってわかるかもしれない。

香織 そんなの嘘に決まってるじゃない。

淑子 昨日までそこにいたのに見つかからないわけないわ。

香織 見つけてどうすんの。

淑子 殺してやる！

香織 馬鹿言わないで。囚人服着たお母さんなんて見たくない。

淑子 とにかくあなたに謝らせる。それから義足取り返して……

香織 もういいよ、義足は。

淑子 取り返して欲しくないの？

香織 そんなこと言ったってしょうがないじゃない。

淑子 簡単に言わないでよ。今までどんな思いでやってきたと思ってるの？ いくらお金が懸ったってあなたが自然に歩けるなら、普通の足に見えるならって、

学校には秘密で内職して、いい技師探して会いに行っ

香織 また買えばいいって言ったくせに。

淑子 言ったわ、言ったけど百五十万よ。

香織 百五十万くらいなんでもないんじゃないの？

淑子 五万が出せない人に何がわかるのよ。

香織 ……

淑子 ごめん、そうじゃなくて。

香織 (自嘲気味に笑い) いいよ、本当のことだから。

淑子 違うってば、そんなことが言いたかったんじゃないの？ (受話器をホルダ―に戻す。) 頑張ってきたのよ、ずっと。欲しいもの我慢して。何年も何年も見て、この服だってもう十年以上着てる。新しい服なんてもう何年も買ってない。そうやって、やっと手に入れた私の願いだった。それをあの笑顔で持って行ったのよ。ニコニコ笑って、私を騙して！

香織 もう、わかったから。

淑子 許せない！ 地獄に堕ちればいいのに！

香織 やめてよ、呪いでもかけるつもり？

淑子 虫も殺さないような顔して腹の中じゃ舌出してたの？

香織 わかんないよ、そんなこと。

淑子 出してたのよきつと！ おばさん達に囲まれながら、真っ赤な舌ペロツと。ちよん切ってやりたい。今すぐこの手で！

花瓶のバラを掴む。

淑子 痛っ。

憎しみを込めてバラをゴミ箱に捨てる。

香織 捨てなくていいのに。

淑子 飾っておけるわけじゃないでしょう！

洗濯物の前に戻り、座る。

淑子 あんなもの持ってきて馬鹿にするにも程があるわ。

洗濯物をたたむ。

怒りで上手くたためない。

香織、ノートとペンを置く。

香織 喜んでたくせに。自分がもらったわけでもないのにはしゃいじゃって。

淑子 はしゃいでなんかいないわよ！

香織 そう？ 慌てて化粧しに行ったじゃない。すっぴん見られたって恥ずかし

がっちゃって。誰も気にしちゃいないのに。

淑子 もういい、もう何も聞きたくない。

香織 あれだけ聞きたがっという今更なによ。

淑子 洗濯物仕舞わなくちゃ。しわになっちゃう。

洗濯物を抱える。半分をテーブルに置く。

淑子 これ、あなたの。

香織、淑子の手を掴む。

淑子 なにするのよ。

香織 ○ヘンリー好きなんですかって。

淑子 え？

香織 そう言われたの、四月の朗読会で。

淑子、香織の手を振り払おうとする。

抱えていた洗濯物がバラバラと床に落ちる。

香織、手を放さない。

香織 ○ヘンリーって人物には興味あるって私が答えて。

淑子 放してよ。

香織 だってそうでしょう。あんな作品書いという横領の容疑で服役してたのよ。

そんな作家他にいる？

淑子 いないわよ、いないから。

香織 ちょっとちゃんと聞いてよ。あの人笑ってた。○ヘンリー嫌いなんですかって、困ったみたいに。

淑子 ……。

香織 苦労してない人にこの面白さはわからないかもしれないけどってからかったら、僕はそんない家の人間じゃありませんってムキになって。

淑子 ……。

香織 それから私の小説の話になったの。なんであんな話になったんだっけ、ああそうだ、ネットで私が書いたもの探したけど、エッセイ集しか見つからなかったって言われたんだ。

淑子 わかった、わかったからもうやめてよ。

香織 わかってんの？ほんとに。学内誌に連載してたのまとめたやつよ。大学院のコンテストで入賞した、覚えてるでしょう？

淑子 これ以上聞きたくない。手放して。

香織 聞きたかったんですよ。

淑子 充分聞いたわ、もうたくさん。

香織 駄目、まださわりじゃない。出版されたのあれだけだって言ったら、あの人がごく残念がってね。仲間内で同人誌作ってるって話したら是非読んでみたかって。だから次の朗読会で貸してあげたの。

淑子 いいから、もう。

香織 同人誌貸したのが日曜日で電話が来たのは水曜日だったかな。すぐに感想伝えたいから近いうちに会いませんかって。

淑子 ……告白されたの。

香織 感想言いたいだけならわざわざ会ったりしないでしょ？ たぶんそういうことだなんて小学生だってわかるよ。

淑子 ……好きだったの？ あなた。

香織 まさか。やめてよ。

手を放す。淑子、尻餅をつく。

淑子 好きでもないのにどうして会うのよ。

香織 いいじゃない、デートくらいしたって。

淑子 感想だけ聞いたらすぐに帰って来られなかったの？

香織 子供じゃないんだから。

淑子 だけど、もうちょっと慎重にしてたら。

香織 しようがないでしょ、温室栽培ですくすく育ったトマトにしか見えなかったんだもん。お母さんだったらどうした？ 私がデートするって言ったら。止めた？

淑子 ……

香織 でしょう？

淑子、洗濯物を握りしめる。

香織、ノートを開く。ペンは動かない。

淑子 ……すぐにホテルに誘われたの？

香織 ううん、始めは喫茶店でランチ食べた。いろいろ話したよ、小説の話とか、いろいろ。そのうち一杯だけってビール飲んだら止まらなくなっちゃって。酔っ払って屈託なくしゃべってるあの人のシミひとつないツルツルの肌見てたら、眉間に皺の一本でも刻んでやりたくなっちゃったの。

淑子 は？

香織 それにはセックスが一番でしょ。

淑子 え？ どういうこと？

香織 どんなに男が気取ったってあの瞬間は皆まぬけ面だから。

淑子 意味がわからない。

香織 セックスの間中、目を閉じてロマンチックな妄想してるタイプだもんね。
運命の恋とか未だに信じてるんじゃないの？

淑子 全然意味がわからない。なんでそういうこと言うの？

香織 だって恥ずかしくて見てられなかったんだもん、バラ抱えて恥じらってる
お母さん。

淑子 恥じらってなんかいいわよ！

香織 よれよれのスーツ着た男が白馬の王子に見えちゃってるお母さんにも、こ
の世で一番美しい恋人どうしになったつもりであいつにも、現実の厳しさって
もんを教えてやろうと思ったの。

淑子 馬鹿じゃないの？ 正気とは思えない。

香織 とりあえず店出ようってことになって外に出たら、あの人すっかりその気
になって、もう少し一緒にいるなんて出来ないよねって遠まわしに言うんだ
もん。笑っちゃった。

淑子 ……

香織 だから私言ったの、「じゃあホテルにでも行く？」って。

(間)

淑子、洗濯物に手を伸ばす。

香織 ……ねえ、覚えてる？ 小学校の頃、スカートめくられた拍子に転んで怪
我したことあったでしょ。

淑子、ゆっくりと洗濯物をたぐり寄せる。

淑子 さあ。

香織 ほら、遠藤って、太った子が犯人で。

淑子 覚えてないわ。

香織 あれだけ怒っておいてよく言うよ。始めはまあまあなんて言ってたくせに、
遠藤がどこまで義足か知りたかったって言った途端、火吹きそうな勢いで怒っ
たじゃない。

淑子 そんなに怒ってないわよ。

香織 怒った怒った。先生まで土下座する勢いだったよ。

淑子 だって黙ってられないでしょう、あんな侮辱。

香織 あの時私思ったの。義足がくっついてるところを見たい欲求ってパンツを
見たい欲求にも勝るんだって。パンツは誰でもはいてるけど義足つけてるのは
私だけだから。

淑子、洗濯物に埋もれている。

洗濯物をたたもうとする。

淑子 なに言ってるの。そんなことないわよ。

香織 浅井さんにも言われたの。

淑子 (手を止める) ……。

香織 義足と足がくっついてるところ、外して見せてって。

淑子 ……。

香織 僕をからかっているんじゃないかって。

淑子 断わらなかったの？

香織 嫌だって言ったら、やっぱり本気じゃないんだって悲しそうにするんだもん。ホテルに入ってキスしたとき、自分は何度も愛してるって言ったのに、君は一度も言わなかったって。仕方ないから外して見せてやったの。そしたらあいつ、今度は僕にやらせてって。もちろん断わったよ。嫌よ、人につけたり外したりしてもらうなんて。でもどうしてもって食い下がられて、一回だけって。

淑子 もういい、話さないで。

香織 あいつ、優しく足をなでながら、義足を外して。それから、つけたり外したり。二度も三度も。

淑子 やめて！ 聞きたくない！

香織 なんか変な気持ちになっちゃったの。…この人と結婚したら、毎朝、毎晩、こうやって足をつけたり外したりしてくれるのかなって。

淑子 ……。

香織 ああ、それもいいなあって。

淑子、洗濯物に顔を埋める。

淑子 私が誕生日なんか教えたから。

香織 やめてよ、そういうの。

淑子 バラなんかに騙されて信じちゃったから。

香織 私だって信じてた、あいつの表情が変わるまで。

淑子 いろんな生徒何百人も見てきたのに。

香織 関係ないでしょ、そんなこと。

淑子 浅井さんと恋愛して、…それで結婚してくれたらどんなにいいだろうって。…だって、あなたのこと全部わかって受け止めてくれる人だと思ったんだもの。義足のことも仕事のこと、私のことも全部。

洗濯物で涙を拭く。

香織 ちょっと洗濯物で拭かないでよ。

淑子 拭いてないわよ。

香織、棚の箱ティッシュを指し。

香織 そこ、ティッシュ。

淑子 (ティッシュを取って鼻をかむ) 私にもうちよっと見る目があれば。

香織 このこ出かけて行ったのは私なんだから。

淑子 私もそれを望んだ。それがあなたの幸せになるんだって。

香織 別にお母さんのために行ったんじゃない。むしろその逆。ばかなこと考えた。それだけのこと。

ノートにメモを書く。塗りつぶす。

書く。塗りつぶす。

淑子、香織の洋服を一枚拾い上げる。

淑子 女っ気のない服ばかり。

香織 ひらひらしたのが嫌いな。

淑子 いっからかしら。小さい頃はひらひらのもの欲しがってたのに。レースのついたブラウスとか、段になったスカートとか。

香織 人と違うことに価値を見出すようになったからでしょ。

淑子 ……足切ってからよね。

香織 そういう路線で行くより有利だって悟ったから。これでも私、結構モテるのよ。

淑子 あなた、昔鞆投げつけたことあったわよね。

香織 そんなこと忘れた。

淑子 中学入った年よ。バレンタインのチョコいそいそ作って、なんだかおしゃれして出て行ったなあと思ったら、泣きながら帰ってきていきなり鞆投げつけて。そのまま部屋に入ったきりいくら呼んでも出てこなかった。

香織 やめてくれる？ 過去の傷ほじくるの。

淑子 あなた何も言わなかったけど、本当はあの時私のせいだって言いたかったんじゃないの？

香織 そんなんじゃない。

淑子 骨髄炎で熱出した時すぐに病院に連れて行ってってくれてたらって。

香織 失恋したショックで当たっちゃっただけでしょ。

淑子 風邪なんか寝てれば治るって言ったから。

香織 私も大丈夫って言った。本当に大丈夫だと思ったから。

淑子 連れて行くこうかと思ってたのよ。

香織 え？

淑子 でもあなたの父親が「病院連れて行った方がいいんじゃないか」って言うから。私だっと思ってたのに、私より先に。

香織 ……

淑子 ずっと帰ってなかったくせに、帰ったとたんに父親面して。

香織 ……。

淑子 あなたが病院行かなくていいって言った時、勝ったと思った。あなたは私を取ったんだって。父親よりもこの私を。

香織 そんなこと考えてたの？

淑子 こんなことになるなんて思わなかったのよ。

香織 ……。

淑子 私がつまらない意地さえ張らなかったら。

香織 もういいよ昔の話は。

淑子 ううん、良くない。もしもちゃんと病院連れて行ったら、あなただってひらひらが好きなままでいられたはずだもの。

香織 別にひらひらなんか好きじゃなかったっていいでしょ。

淑子 きっと今頃普通に結婚して子供産んで。あんな男に傷つけられずに済んだはずよ！

淑子、洗濯物で涙を拭く。

香織 なんて言って欲しいの？

淑子 え？

顔を上げる。

香織 なんて言って欲しいのかって聞いているの。

淑子 ……。

香織 やめてくれる？ 馬鹿馬鹿しいから。

淑子 ……なによ。

香織、メモを書く。

淑子 なに、なにがよ。

香織、淑子を一瞥する。視線をノートに戻す。メモを書く。

淑子 どうしてそういう目で見えるの？

香織、無視して書き続ける。

淑子 私のことバカな女だと思ってるんでしょ。

香織、書き続ける。

淑子 書くのやめて、こっちは見なさいよ。

香織 ……。

淑子 やめなさいってば！

ノートをひったくる。

香織 何すんのよ！

淑子 人が謝ってるのに、馬鹿にするのもいい加減にしなさいよ！

香織 お母さんのせいじゃないって言って欲しいだけでしょ。見え透いてんのよ。

淑子 そんなこと思っていない。私が悪かったって言ってるじゃない！

香織 よく言うよ。自分が悪いなんて思ってもいなくせに。お母さんはね、そ

うやって自分を責めるフリをして人を悪者に仕立てるの。「私が悪い」って

言われたらそんなことないって言うしかないもんね。そういうの偽善っていう

んだよ。わかってる？

淑子 人のせいになんてしようとしてないわ。

香織 本当はなにもかもお父さんが悪いと思ってるんですよ。

淑子 そんなこと思っていないわよ！

香織 じゃあどうしてお父さんが出てくるの。ずっと帰ってこなかったとか、父

親面したとか。

淑子 あの人のせいにしたくないんじゃない。だけど。

香織 だけど、なに。

淑子 あなたは何も知らないのよ。

香織 お父さんのことなら知ってるわ。

淑子 なにを知ってるって？ 笑わせないで。

香織 女がいたんですよ。

淑子 ……。

香織 お母さんよりずっと若くて綺麗な人。

淑子 あの子は。

香織 ごまかさなくたっていいよ。二人で会ってるとこ何度も見たから。

淑子 違う、そうじゃなくて。

香織 魅力ないのが悪いのよ。

淑子 は？

香織 ろくに化粧直しもしなかったんですよ。

淑子 私のせいだって言うの？

香織 努力のしようはあったんじゃないの。

淑子 あの子、あの人の娘よ。

香織 え？

淑子 あなたの父親がまだ学生だった頃、どっかの人妻に産ませた子。

香織 なに言ってるの。

淑子 あの子、美大の学生だった。なんだかよくわからない油絵書いてて。いつだったか、あなたが骨髄炎になる前、知り合いが個展やるからって一緒に観に行かされた。娘だなんて知らないから、私喜んで庭のバラ花束にして持って行った。

香織 それだけじゃ娘かどうかわかんないじゃない。

淑子 その帰りに言われたのよ。あの子の母親と一緒にいたいって。俺にはあの親娘が必要なんだって。

香織 嘘。

淑子 ずっとあの子の母親と結婚したかったって。彼女とは一輪の花について何時間でも語り合える。学生の時からずっとそうだったって。笑っちゃうでしょ。お前は機械的に手入れするばかりで花の一つ一つがどんな表情をしているかなんて考えたこともないだろうって。そりゃそうよ。花なんかに見とれてたらあっという間にアブラムシまみれだもの。花が枯れたら花がらを摘まなくちゃいけないし、雑草だっってどんどん生えてくるのよ。こっちは仕事から疲れて帰ってきて、やっとの思いで手入れしてるのに、花を楽しむ暇がどこにあるっていうの？

香織 ……頼まれたわけじゃないでしょ。

淑子 頼まれたわよ。誕生日に苗木買ってきて大切にしてくれて。だから世話してきたんじゃない。冷たい風びゅーびゅー吹く中スコップ持って一日中庭に這いつくばって、土にまみれて。バラの香りなんて全然しなかった。肥料と消毒薬と潰したアブラムシの匂い。学校で生徒に言われたわ。先生、牛の匂いがするって。だけど、あなたの父親がくれたバラだから。あなたと二人で花が咲くのを楽しみにしてると思うから、喜んでもらいたくて。それなのにこんな酷いじゃない。裏切りよ。

香織 もういい。

淑子 急にミミズになったみたいだった。人目につくこともなく、土の中で一生懸命働いていたら、花を見に来た人間に踏み潰された。

香織 わかったから。ノート返して。

淑子 訂正しなさいよ。

香織 はあ？

淑子 お父さんも悪かったって訂正しなさいよ。

香織 なんなの急に。

淑子 私だけが悪いんじゃない。それだけは譲れないわ。

香織 お父さんが悪かった。義足になったのはお父さんのせい。これでいい？

淑子 ……。

香織 ノート返して。

淑子 ……。

香織 わかった。そこから書いてあげる。

淑子 は？

香織 小説よ。お母さんの恨み節から物語が始まるの。いいじゃない。

淑子 馬鹿なこと言わないで。冗談じゃないわ。

香織 ミミズのくんだりなんか面白かった。足切ったからはどうだった？ どんな気持ちで土掘り返してたの？

淑子 なんなのよ。

香織 最後はどっちが切り出したの？ お父さんが出て行ってほっとした？ ど

うして引き下がろうと思ったの？ ねえ、教えてよ。

淑子 なんてそんなこと言わなくちやいけないのよ。

香織 よくぞ書いてくれたっていうもの書いてあげるから。

淑子 あなたになんか書けるわけじゃないじゃない。

香織 そんなのやってみないとわかんないでしょ。ほら早くノート返して。

淑子 私の気持ちが変わってたまるもんですか。

香織 いいから返してよ。

淑子 嫌よ、絶対渡さない。

香織 早く！

淑子 なによ、こんなもの！

ノートを破く。床に叩きつける。

バラバラになったページが散らばる。

香織 もう、何すんの。

淑子、散らばったノートを見ている。

香織 ちょっと早く拾ってよ。

淑子、一枚を手に取る。次の一枚。また次の一枚。

そこに書かれたメモは全て黒く塗りつぶされている。

淑子 全部消してあるじゃない。

香織 ……。

淑子 ねえ、これ。

香織 お母さんがうるさいからでしょ。

淑子 あなた書けないの？

香織 これから書くの。黙っててくれればすぐ書ける。

淑子 書けないんじゃない、やっぱり。

香織 そんなことないってば。返してよ！

淑子からノートを引ったくる。白紙のページを探す。
メモを書く。塗りつぶす。書く。塗りつぶす。

淑子 書けやしないわよ。
香織 書ける。書けないはずない。

書く。塗りつぶす。書く。塗りつぶす。

淑子 あきらめなさいよ、書けないんだから。
香織 うるさい、黙っててよ！

淑子 書かなきゃいいじゃない、書けないんだったら。

香織 何も書かなかつたらこのままここで止まっちゃうじゃない。

淑子 なにが？ なにが止まるっていうの？

香織 言葉があれば立っていられるの、義足なんかいらないの。書けないはずない、だってずっと書いてきたんだから！

淑子 なに言ってるの？ 意味がわからないわよ。

香織 （鼻に両手をあて息を吸い込んで）どうしよう、匂いが消えちやう。あいつの匂い。一生忘れないと思ったのに。乳臭くって甘ったるくて。バラの匂いなのか、私の匂いなのか、よくわからなくなってきちゃった。

淑子 いいじゃない。そんなのさっさと忘れなさいよ。

香織 忘れないよ。這って逃げた時のカーペットの感触も。やっと掴んだ椅子の軽さも。天井に映った自分の姿も。……全部書いてやるんだから。誰がなんと
言ったって書き残してやるんだから。

書こうとする。なにも書けない。

ノートとペンを床に投げ出す。

（間）

淑子、ゆっくりと散らばったノートを集める。ペンを拾う。

ノートとペンをテーブルに置く。

鞆を拾う。散らばった中身を拾い、鞆に入れる。

香織の横に鞆を置く。

香織、鞆を見つめる。

香織 義足のついでだったの。

淑子 なにが？

香織 あいつの目的は義足だった。身体になんか興味なかった。

淑子 え……

香織 （鞆をなでる。）あのポストンバック。

淑子 父親からもらった。

香織 あれにね、コレクションしてるんだって。義手とか義眼とか。私の義足も仕舞ってた。

淑子 ……。

香織 見せてくれたわ、どっかの障害者から騙し取った義眼。ゴロツとしてて血管まで本物そっくりだった。いつも持ち歩いてたのね、あのポストンバッグに入れて。

淑子 まともじゃないわ、狂ってる、キチガイよ。

香織、鞆を両手で持ち上げる。

香織 あいつ言ってた。笑いながら、私を物みたいに見下ろして。

鞆を見下ろす。

香織 君は苦労が人を成長させるって思ってるみたいだけど、僕はそうは思わない。人間は自分の不幸を直視出来るほど強くない。自分に都合のいい言葉にすがろうとするんだ。だから苦労すればするほど騙しやすい。

淑子 やめてよ！

鞆をはたき落とす。

香織 例えば僕が白い杖を持った人に声を掛ける。大丈夫ですかって優しい声で。相手は大抵頬を上気させて嬉しそうに近づいてくる。今までの苦労が全部報われたみたいだね。その瞬間、僕は白い杖を蹴飛ばすんだ。思いっきり。相手は訳も分からず這いずり回る。そしてやっと騙されたことに気が付く。怒り。恐怖。表情がみるみる変わる。わくわくする。たまらないよ。そして最後の希望を取り上げる。彼の白い杖。彼は絶望の底に沈んでいく。どこまでも。どこまでも。

淑子、突然立ち上がる。

窓に駆け寄る。

香織 ちょっと！ なに？

窓を開ける。庭に飛び出す。

香織 どこ行くの？ サンドールくらい履きなさいよ！

大きな物音。物置の中身をひっくり返す音。

香織 何やってんの？ ちょっと。

身体を精一杯乗り出し、庭を見る。

香織 危ないじゃない、そんなもの持ち出して何するつもり。ちょっと変なこと考えてるんじゃないでしょうね。あいつはもう捕まらないのよ！ ……お母さん？ 何する気？ 怪我するよ、そんなもの素手で掴んだら……ああ！ ちよっと！ なにやってんの！ お母さん！ 聞えないの？ やめてってば！ 葉っぱだけになっちゃうじゃない。やっとなめたのに！ やめて。これ以上切らないで！

辺りを見回す。ティッシュの箱を掴む。投げる。

辺りを見回す。鞆には手が届かない。

ノートを投げる。重さがなくて届かない。

香織 わかった、わかったから、もうやめて。ずっと育ててきたバラでしょう。あんなに喜んでたじゃない、今年は黒点病もウドンコ病も大丈夫だったって。どうしてそんなことするのよ。ね、やめて！ お願い、お母さん！

その場にへたり込む。

香織 まだ蕾だってあったのに……

淑子、両手を傷だらけにして、部屋に入ってくる。

淑子 切ってやった！ 切ってやった！

香織 ……なんてことするの？ 気でも違った？

淑子 見て！ 全部切ってやった！

香織 なんなのよ一体？ 手怪我してるじゃない。

淑子 安心しなさい、復讐してやったから。もう二度と誰もあなたを傷つけたりしないから。もっと早く切れれば良かったのよ、あんなバラ。あなたの父親が出て行った時にあなたが泣こうが叫ぼうが切ってやればよかった！ そしたらもう一度信じようなんて思わないで済んだのに。馬鹿にして。冗談じゃないわ。バラが好きな奴なんてみんな死んでしまえばいい！

香織、呆然と淑子を見つめる。

(長い間)

淑子、両手の血を洋服で拭う。

ゆっくりと散らばった洗濯物を集める。

鞆を拾う。中身がこぼれていたら拾って鞆に詰める。

鞆を香織に渡す。

淑子 もう忘れなさい。悪い夢でも見たと思って。

香織、鞆を受け取る。小さく笑う。

淑子 なにがおかしいの？

香織 どうして書けないのかわかった。

淑子 え？

香織 あいつが出て行った後、震えが止まらなくて、戻ってきたら今度は殺されるんじゃないかってそればかり考えてた。扉が開いたら殺されるって。扉が開かなきゃ出られないのよね。電話越しにお母さんの声聞いたときホッとして涙が止まらなかったの。助かったと思った。……私ね、あいつが言ってることもわかるのよ。ううんそうじゃない。わかると思ってた。だって私だってあるもん、この白い杖蹴飛ばしたらどうなるんだろうって思ったこと。だけどやっぱりわからないの。実際にやるのは全然違うことだもん。それを心から楽しめる、その神経はどうしても理解できない。……そこで思考停止しちゃうのよ。理解できると思っただのに。普通の人にはわからなくても私にはわかるって。だって普通の足じゃ歩けない特別な道を歩いて来たんだもん。……そう信じてたのに……違うのね、特別な道なんてなかったんだ。

淑子 特別よ、あなたが歩く道は。決まってるじゃない。

(長い間)

香織 (ぽつりと) 明日、警察行く。

淑子 え？

香織 義足取り戻したい。

淑子 ……うん、そうしよう。

淑子、立ち上がる。

義足と松葉杖を香織の側に置く。

香織 ずっと義足だから書き続けられるんだと思ってた。

淑子 え？

香織 私ね、思い出した。作家になろうと思ったときのこと。エッセイ集の評判がよくって、この勢いで小説もって。あの時は皆にちやほやされて才能あるって。作家になるのが運命だと思った。それが使命なんだって。就職なんて考えもしなかった。……だけど本当は私が作家になりたかっただけだったんだ。足のことを書くために書き続けてるんじゃない。書き続けるために義足のことを書くしかなかったんだ。

淑子 義足のことはもう書かないの？

香織 書き続けるしかないってことよ、書けることを。

(間)

淑子 わかったから早く寝なさい。

香織 まだ眠れない。書かなくちゃ。

淑子 眠れなくても寝るの。目閉じてれば眠れます。

香織 (残った洗濯物を指し) これは？

淑子 明日でいいわ。腐るもんじゃなし。

集めた洗濯物をソファに乗せる。

香織、その様子を見つめる。

開いた窓から春の風が舞い込む。

五月の夜の風。木々の匂い。

香織 あ、バラの香りがする。

淑子 ……しないわよ、そんなもの。

香織 するわよ、ほら。

淑子、立ち上がる。

テーブルに乗せた洗濯物を抱える。

淑子 部屋に持っていっとくわね。

香織 (淑子を見ずに) ……ありがとう。

淑子、部屋を出る。

香織、ゆっくりと散らばったノートを集め、整える。

ノートを開く。一枚、一枚記憶のページをたどる。

丁寧に。ゆっくりと。

白紙のページにたどり着く。そっとペンを取る。

香織 書くしかないのよ……

ノートにメモを取り始める。
淑子、戻ってくる。
香織、メモを書き続ける。
淑子、かける言葉が見つからず、いつまでもその場に立ちつくす。

溶暗

幕

(第十一稿 二〇一二年八月三一日)

主要参考文献

フラナリー・オコナー

「田舎の善人」

「善人はなかなかいない」

「最後の「葉」」

参考文献

カレル・チャペック

「園芸家一二ヶ月」

引用

フランツ・カフカ

「夢・アフォリズム・詩」